

## 女子学生における自己と父母の認知について(5)

——三者間の似よりもとづく分析——

秋 山 幹 男

On Female Students' Cognition of the Self and the Parent (5)

——Analyses based on the similarity of three persons——

Mikio Akiyama

このテーマで研究がスタートしたのは1974年であった<sup>1)</sup>。以後かなりの曲折を経て、6年後に、学生のみた自己と両親の三者の認知関係を方法論的に納得のいく線まで追求してみた成果をまとめ上げた<sup>2)</sup>。その折には、4年間調査に協力してくれた10名の学生のデータをもとにしていろいろな分析を試みたのであるが、7区分表示法を用いると、三者間の認知関係をタイプ分けにすることができることに気付いた。そこで引き続き、1981年にはこのタイプの抽出に力を注いでみた<sup>3)</sup>。1972年から1975年までの第一次の調査に2年以上協力してくれたすべての学生のデータを生かすことを条件にして、2年連続して選択された性格項目を取り上げ、1・2年時と3・4年時に分けて比較検討がなされた。その結果、三者共通型・母子接近型・父子接近型・父母接近型・個性型という5つの認知タイプを取り出すことができたのである。

その後は、データの収集に努め、特に1982年から1985年までの第二次の調査では、4年間通して協力してくれた学生数は34名になっている。この間学会発表を中心に研究を進めていたが、論文化はできなかった<sup>5)6)7)8)</sup>。その理由の一つとして、女子学生の自己と父母の性格把握を調べるために使用している西平の調査項目(75項目)<sup>13)</sup>に対し、いろいろな迷いが生じたことがあげられる。その都度小さな変更を取り入れていったのだが、1985年のコンピュータ使用の際に、思い切って項目の整理をし56項目に絞り切った。彼が青年の自我同一性を調べるために作成した項目は、対人関係・自己意識・社会態度・人生態度などをみるものとして選び出されたものであった<sup>14)</sup>。これを本研究のように、青年の自己を調べるためだけでなく、彼女達の両親にまで広げて用いる場合、西平の取り上げたものと同じような人格認知因子(次元)によって構成されているのかどうかを確かめたいと考えた結果が前回の報告となった<sup>4)</sup>。因子分析によって析出された4つの因子は、第1因子「内向性」、第2因子「自己顕示性」、第3因子「誠実性」、第4因子「明朗性」と命名された。西平の項目抽出の選択基準とうまく対応することがわかったが、これらは56項目のうち42項目で構成されており、残りの14項目は各因子の中に含まれなかった。この同じ1985年の研究では、4因子の因子別得点をもとにして、“似ているもの”という捉え方を導入し、コンピュータによるクラスター分析も試みられた<sup>4)</sup>。

この「似より」という概念は、これまでの研究方法を大きく見詰め直すことになった。1981年以降踏襲してきている認知タイプによる群分けでは、データの半分位しか生かし切れないという問題がある。そこで、もう一度群分けの原点に立ち帰り、同一線上に並べることができ、しかも収集したデータのほとんどすべてを生かせるものとして、7区分表示法にもこの「似より」という見方を採用することにしたのである。以来、今日まで、認知タイプで整理していた

すべてのデータを似よりによる群分けのものに切り換える作業を続け、ようやくのことで1987年よりこの似よりもとづく新しい発表が始まることになった<sup>9)</sup>。

本研究の目的：

- (1) 似よりによる群分けの特徴を明らかにする。
- (2) 似よりと認知タイプとの関係について触れてみる。
- (3) H・Lパターン分析（手計算的アプローチ）でどの位コンピューターによるクラスター分析に迫れるものかを調べてみる。

## 方 法

対 象 者 広島文教女子大学文学部（国文学科・英文学科・初等教育学科）と短期大学部（幼児教育学科）の1・2年生である。秋山・有馬（1985）<sup>4)</sup>では279名で分析がなされたが、今回は“どちらともいえない”という判断が特に多かった3人を除いた276名を対象とした。

実施期日 1982年（昭和57年）12月中旬に調査用紙を配布し、同年12月25日までの間に回収した。

実施方法 調査用紙を封筒に入れて学生達に配布し、記入が済んだら提出するように求めた。記入は各自の住居においてなされた。

調査内容 西平が作成した75項目のうち73項目で調査がなされたが、分析に当たってはさらに17項目を除いた56項目のみを利用した。評定の対象は、「自分自身」「青年らしさ（女性）」「母親（自分の）」「父親（自分の）」の4つとし、この順に冊子化されている。ただし、「青年らしさ」については今回も分析から外した。学生達には、各評定対象について5段階で評定するように求めた。

分析に使用した56項目は次の通りである。

- |                |                 |                |
|----------------|-----------------|----------------|
| 1 親切           | 20 ヒステリックな      | 39 友人の多い（社交的な） |
| 2 おく病な         | 21 冒険好きな        | 40 他人を気にする     |
| 3 さっぱりした       | 22 不安定な         | 41（毎日の生活に）生き甲斐 |
| 4 虚栄心の強い       | 23 献身的な         | を感ずる           |
| 5 やさしい         | 24 趣味の広い        | 42 利己的な・自己中心的な |
| 6 なげやりなところのある  | 25 スケール（器）の大きな  | 43 宗教的な（敬虔な）   |
| 7 ユーモアのある      | 26 あきっぱい        | 44 しょげやすい      |
| 8 頑固な          | 27 古いものの考え方をする  | 45 ロマンチックな     |
| 9 ものを深く考える     | 28 疑い深い（不信の）    | 46 支配欲の強い      |
| 10 意志の弱い       | 29 礼儀正しい        | 47 理想主義的な      |
| 11 しつと深い       | 30 甘え（た）        | 48 ひねくれた       |
| 12 明るい         | 31 わがままな        | 49 几帳面な        |
| 13 感傷的（オセンチ）な  | 32 未来に大きな希望をもつ  | 50 正義感の強い      |
| 14 行動力のある      | 33 無責任な         | 51 ニヒルな（未来に希望や |
| 15 内気な（はにかみやの） | 34 包容力のある       | 理想のない）         |
| 16 孤独な         | 35 粗暴な          | 52 調和のとれた      |
| 17 指導力のある      | 36 ねばり強い（根性のある） | 53 独立心の強い      |
| 18 神経質な（線の細い）  | 37 素直な          | 54 強がり（の態度をとる） |

19 体の強い (たくましい) 38 服従的な

55 ひたむきな

56 うぬぼれの強い

データの処理 得られた結果は、2種類の変換がなされた。まず、7区分表示法の場合には、非常にそう思う・どちらかといえばそう思うを「はい」、どちらかといえばそう思わない・全くそう思わないを「いいえ」とし、ふつう・わからない・なんともいえないを「？」に置きかえて、はい？ いいえの3段階に変換し、「はい」と「いいえ」をもとにしてすべての処理がなされた。

次に、秋山・有馬 (1985)<sup>4)</sup> が抽出した4因子の因子別得点をもとにした分析では、非常にそう思うから全くそう思わないまでを5～1の得点に変換した。

## 結果と考察

276人の女子学生（自分）と彼女達の両親を年齢別の出現率でみたのが表1-1と表1-2である。学生は19～20歳、母親は40～49歳 (75.4%)、父親は45～54歳 (81.6%) が主たる対象となっている。表2-1～3は、学生達のきょうだい数、きょうだい構成、出生順位をみたものである。

表1-1 学生の年齢分布  
(単位%)

Age	自分
18	12.7
19	46.0
20	34.4
21	2.2
不明	4.7

表1-2 両親の年齢分布  
(単位%)

Age	母親	父親
35-39	1.1	0.7
40-44	33.7	5.1
45-49	41.7	45.7
50-54	18.1	35.9
55-59	2.5	8.0
60以上	0.0	1.8
不明	2.9	2.9

表2-1 きょうだい数  
(単位%)

1人っ子	2人	3人	4人	5人	不明
7.2	57.6	29.7	4.0	0.7	0.7

表2-2 きょうだい構成  
(2人以上) (単位)

女のみ	男と女
37.0	63.0

表2-3 出生順位  
(単位%)

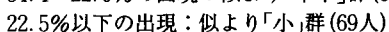
1人っ子	長子	二子	三子	四子
7.2	52.9	29.6	8.8	1.5

2人きょうだいと3人きょうだいで全体の87.3%を占めているし、出生順位からみると、長子と二子が今回の分析対象の中心をなしているといえよう。

### 三者間の似よりにもとづいた群分けについて

7区分表示法を用いる場合には、「はい」か「いいえ」のいずれかで選択された項目がデー

表4は、7区分ごとにみた性格特性項目の平均出現率を、4群と全体別に表したものである。三者共通区分③)の中の【自分】による群分けは、その他の区分と反比例的な出現をみせていくことがわかる。似より「大」群の性格特性項目が区分③へ集中するのに比べて、似より



— 86 —

女子学生における自己と父母の認知について(5) (秋山)

表4 7区分ごとにみた性格特性項目の平均出現率とSD

(単位 出現項目の%)

群	区分	① 自分のみ	② 母子共通		③ 三者共通			④ 父子共通		⑤ 母親のみ	⑥ 父母共通		⑦ 父親のみ
			自分	母親	自分	母親	父親	自分	父親		母親	父親	
似より「大」	M	19.8	11.8	11.0	57.6	53.7	52.3	10.8	9.8	12.4	22.8	22.3	15.6
	SD	6.0	7.0	7.0	8.9	9.7	9.6	6.4	5.5	6.6	10.3	10.1	7.8
似より「中上」	M	27.0	16.0	15.5	40.1	39.7	39.2	17.0	16.2	20.5	24.4	23.9	20.9
	SD	10.2	9.0	8.6	3.3	7.0	7.9	9.5	8.5	9.5	11.5	10.8	8.3
似より「中下」	M	31.0	22.2	21.2	29.0	27.7	28.9	17.7	17.1	26.2	24.9	25.8	28.2
	SD	10.3	8.8	8.4	3.4	5.1	6.1	8.9	8.1	9.8	12.4	12.7	9.8
似より「小」	M	41.7	23.3	24.0	15.2	15.6	15.9	19.8	21.0	34.1	26.5	27.2	35.9
	SD	14.7	10.6	11.6	5.9	6.9	6.6	11.7	12.7	13.5	14.0	13.8	13.2
全 体	M	29.9	18.3	17.9	35.5	34.2	34.1	16.3	16.0	23.3	24.7	24.8	25.2
	SD	13.4	10.1	10.4	16.6	15.9	15.4	9.9	9.9	12.9	12.2	12.1	12.6

「小」群の場合は、自分のみ区分(①)、母親のみ区分(⑤)、父親のみ区分(⑦)で特に高い出現率をみせている。

三者間の似よりと4因子の平均得点との関係について

前報<sup>4)</sup>では、女子学生が「自分自身」「母親」「父親」についてそれぞれ同一の56項目で評定(回答)しているので、この性格特性の得点をもとにして、三者間に共通する人格の認知次元を抽出するために因子分析を用いた。その結果、42項目は4つの因子のいずれかに包括されることが分かった。第1因子(内向性)は、12の項目より構成され、「人を意識しているわりにはものごとに対し消極的で、内にこもりがちである」という人格の側面を析出し、第2因子(自己顕示性) — 9項目 — では、「自己主張が強く、相手に自分の存在を認めさせたいという、自己中心的な側面を捉えている」とみなされた。第3因子(誠実性) — 14項目 — においては、「節度をわきまえた温かみのある懐の深さと、何ごとにも粘り強く手を抜かずに打ち込む」という人柄の面を示し、第4因子(明朗性) — 7項目 — は、「明るく、社交性があり、未知なるものへと前向きに取り組む人格の特徴を捉えたもの」として各因子の命名がなされたのである。

4因子の平均得点を出すために、まず、マイナスの高負荷量をみせた項目の得点については(6-x<sub>i</sub>)の変換を行った。該当する項目は7つ。行動力のある、指導力のある、スケールの大きな(以上F1)、なげやりなところのある、無責任な、あきっぽい(以上F3)、孤独な(F4)であった。次に、因子を構成している項目得点を加算し、これを項目数で割ることによって、3つの評定対象ごとの4因子について平均得点を算出した。表5は、4群と全体からみた評定対象ごとの因子別の平均得点とSDである。

三者間の似よりの度合が大から小へと移行するにつれて、各評定対象ともに、F1とF2は上昇的变化、F3とF4は下降的な変化となっていたのである。得点の差(認知の差)の有意性を検討するために、この因子得点をもとにして4つの因子ごとに、2群(似より「大」と似より「小」群) × 3評定対象(「自分自身」「母親」「父親」)の二要因分散分析を行った。

F1 内 向 性: 群F(1,408)=53.37, P<.01 評定対象F(2,408)=144.15, P<.01

F2 自己顕示性: 群F(1,408)=58.17, P<.01 評定対象F(2,408)=33.17, P<.01

F3 誠 実 性: 群F(1,408)=155.36, P<.01 評定対象F(2,408)=50.14, P<.01

F4 明 朗 性: 群F(1,408)=114.51, P<.01 評定対象F(2,408)=0.86, ns

表5 評定対象ごとにみた4群と全体の因子別平均得点とSD

群	評定対象 因子*	自分自身				母 親				父 親			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
似より「大」	M	3.03	2.80	3.66	3.91	2.37	2.26	3.93	3.97	2.01	2.56	4.04	3.96
	SD	0.50	0.52	0.37	0.53	0.42	0.52	0.45	0.53	0.52	0.58	0.43	0.62
似より「中上」	M	3.17	3.07	3.48	3.74	2.57	2.48	3.80	3.68	2.18	2.76	3.84	3.69
	SD	0.65	0.68	0.36	0.54	0.55	0.57	0.38	0.55	0.52	0.64	0.44	0.57
似より「中下」	M	3.39	3.20	3.31	3.48	2.70	2.63	3.66	3.56	2.37	2.96	3.62	3.34
	SD	0.51	0.68	0.37	0.65	0.48	0.66	0.40	0.58	0.59	0.75	0.46	0.57
似より「小」	M	3.46	3.31	3.16	3.31	2.66	2.68	3.65	3.40	2.41	2.98	3.49	3.26
	SD	0.50	0.62	0.40	0.63	0.51	0.60	0.41	0.55	0.63	0.72	0.50	0.65
全 体	M	3.26	3.10	3.40	3.61	2.58	2.51	3.77	3.65	2.24	2.82	3.75	3.56
	SD	0.57	0.66	0.42	0.63	0.51	0.61	0.43	0.59	0.58	0.70	0.50	0.67

\* F1. 内向性 F2. 自己顕示性 F3. 誠実性 F4. 明朗性

いずれの場合にも交互作用には有意差なし。

- ・評定対象ごとの群間の差の検定は、4因子のすべてに $P<.01$ で有意差あり。
- ・群ごとの評定対象間の差の検定では、F1, F2, F3ともに $P<.01$ で有意差がみられたが、F4には差はみられなかった。
- ・個々の平均差は、危険率(有意水準)を.05に設定して、Tukey法による多重比較を試みた。F1とF2では2群とも自分 vs. 母親, 自分 vs. 父親, 母親 vs. 父親のすべての組み合わせにおいて有意差あり。F3では「大」群の母親 vs. 父親以外の5つの組み合わせで有意差あり。F4ではすべて有意差がみられなかった。

自分自身についてみると、似より「小」群の学生達は「大」群の者に比べて、内向性が高く、自己顕示性も強いと認知しているのに対し、「大」群の方は「小」群よりも、自分をより誠実で、明朗であるとみなしている。両親については、F1の平均得点は自分の場合に比べると共に低く、特に父親の低得点化は2群共に著しい。しかし、群差ははっきりと現れており、「小」群の両親は「大」群のそれよりも高い得点となっている。F2の場合は特に母親の得点が低いけれど、群間の差はF1と同じである。F3については両親とも自分以上に誠実であるとみなしているが、群差は大きく出ている。F4では親子の認知の間に差はなくなっているが、群間の差は著しく、「大」群の方が「小」群の者よりもより明朗であると認知している。総じて、女子学生達は両親を自分自身よりもプラス的に捉えているけれども、「大」群の学生達の方が「小」群の者よりもより強くプラスの受け止め方をしているといえよう。

#### 性格特性項目56コの出現について

##### ——似より「大」群と「小」群の比較——

4つの因子を支えている42の項目と残りの14項目は、「大」群と「小」群ではどのような現れ方をしたのだろうか。ここでは「はい」と「いいえ」に変換されたデータをもとに2群間の比較が行われた。出現者率で有意差のあった項目を取り上げ検討がなされたが、2群ともに15%未満の出現者率で差をみせた場合は、今回除外することにした。なお、表記上の都合で「はい」は(+), 「いいえ」は(-)とした。

内向性を構成する項目について(表6): 自分自身については12項目のうち8項目において2群間に差がみられた。総じて、「大」群の学生の方が自分をプラスの方向で受け止めている

女子学生における自己と父母の認知について(5) (秋山)

者が多い。両親についてもこの事はいえるが、出現者率については、自分よりも母親、母親よりは父親の方がより高い出方をみせている。これに対し、「小」群の学生は自分というものをマイナス的に認知する者が多いけれど、両親の場合にはマイナス的な項目の出現者率は小さく

表6 F1 内向性を構成する項目についての2群間比較

(単位%)

項目 群	評価対象	自分自身	母 親	父 親
		大 小	大 小	大 小
し ょ げ や す い (+)		43.4<63.7*	—	—
(-)		36.1>18.8*	69.5>49.3*	82.5>55.1**
お く 病 な (+)		24.5<60.8**	—	4.2<18.7*
(-)		43.4>21.7**	75.3>52.1**	82.6>59.3**
意 志 の 弱 い (+)		20.2<65.2**	—	—
(-)		57.9>12.9**	94.2>65.2**	92.7>69.5**
甘 え た (+)		44.8<68.1**	—	—
(-)		39.0>12.9**	—	79.6>62.3*
行 動 力 の あ る (-)		14.5<28.9*	4.3<15.8*	—
(+)		55.0>34.7*	78.2>58.0*	89.7>68.1**
指 導 力 の あ る (-)		24.6<44.9*	11.5<26.0*	—
(+)		42.0>18.7**	60.9>40.6*	83.8>60.8**
スケールの大きな (-)		28.9<59.3**	14.5<31.8*	7.2<26.0**
(+)		33.3>10.0**	53.6>27.4**	72.4>39.0**
内 気 な (-)		55.0>36.2*	—	—

註 1) 「感傷的な」「ロマンチックな」「他人を気にする」「服従的な」は有意差なし

2)  $\chi^2$  検定は人数で実施。\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表7 F2 自己顕示性を構成する項目についての2群間比較

(単位%)

項目 群	評価対象	自分自身	母 親	父 親
		大 小	大 小	大 小
利 己 的 な (+)		17.2<46.3**	2.8<15.9**	15.8<30.4*
(-)		55.0>23.2**	82.5>50.7**	60.8>39.1*
支 配 欲 の 強 い (-)		—	59.3>36.1**	—
強 が り (+)		60.8<76.7*	—	—
うぬぼれの強い (+)		24.5<43.5*	—	—
(-)		39.0>21.7*	68.0>42.0**	56.4>37.7*
わ が ま ま な (+)		31.7<60.9**	—	—
(-)		59.3>15.9**	89.7>63.8**	79.6>50.7**
ひねくれた (+)		8.7<30.3**	—	—
(-)		72.4>36.1**	91.2>75.3*	86.8>50.6**
虚栄心の強い (+)		36.2<59.3**	18.8<42.0**	21.7<37.6*
(-)		24.6>11.5*	49.3>24.6**	—
粗 暴 な (+)		—	—	4.3<26.0**
(-)		78.2>49.2**	—	84.0>43.4**

註「頑固な」は有意差なし

なるし、まったく「大」群と差をみせない項目もある。

自己顕示性を構成する項目について（表7）：ここでの項目分析からは、自分を相手に認めさせたい（認めてもらいたい）という気持ちの強い者が「小」群の方に多いということがわかる。「大」群の方は、さほど自分を前に出さなくとも、ある程度満足できるものを自分なりに持ち合わせているのだろうか。両親については、好ましい認知がなされている。一家の主婦として利他の精神を身につけている母親に対して、好ましい捉え方をする学生の多い項目群である。しかし、虚栄心の強さ、利己的な面については、出現者率は低いけれども両親がそうだとみる者が「小」群の学生の方に多いのが目につく。父親が粗暴であるという受け止め方をする者も、「小」群の方に多いという点も気になる点ではある。

誠実性を構成する項目について（表8）：自分自身について「小」群では、なげやりなところがあり、あきっぱく、粘りがないとみなす者が半数以上おり、さらに、包容力がない、几帳面でない、ひたむきでない、調和がとれないと受け止めている者が多量で、「大」群との間に有意な差をみせている。一方、このような自己認知をする者は「大」群の方には少なく、自分は無責任ではなく、やさしい、正義感強く、親切で礼儀正しいと認知する者がほとんどである。少し自信過剰な様にも思われるのだが、自己顕示性を支える項目群との比較でみる限りは、自分を自己中心的であるとはみなしていない。次に両親をみると、母親の場合は好ましい受け止め方についてのみ群差が出ている（8項目）。調和のとれた以外の項目は半数以上の出現をすべてみせているが、その出方は「小」群の方がやはり少ない。好ましくない捉え方について

表8 F3 誠実性を構成する項目についての2群間比較

(単位%)

項目	評定対象	自分自身		母 親		父 親	
	群	大	小	大	小	大	小
礼 儀 正 し い (+)		79.7	>44.8**	92.7	>76.7*	92.7	>53.6**
ね ば り 強 い (+)		55.0	>14.5**	82.5	>62.2**	88.3	>57.8**
	(-)	13.0	<50.6**	—	—	—	—
几 帳 面 な (+)		56.4	>33.3**	—	—	70.9	>47.8**
	(-)	18.8	<34.7**	—	—	11.5	<27.4*
ひ た む き な (+)		50.7	>27.4**	—	—	52.2	>31.8*
	(-)	14.5	<34.7*	—	—	—	—
包 容 力 の ある (+)		40.5	>14.5**	89.8	>53.6**	91.2	>58.0**
	(-)	14.5	<40.5**	—	—	—	—
正 義 感 の 強 い (+)		85.5	>55.0**	81.1	>53.6**	94.1	>59.3**
献 身 的 な (+)		68.0	>42.0**	—	—	53.5	>27.5**
親 切 な (+)		84.0	>46.3**	—	—	91.2	>69.6**
や さ し い (+)		85.5	>46.3**	—	—	92.7	>62.3**
なげやりなところのある (-)		49.2	>20.1**	88.4	>69.5**	88.4	>56.4**
	(+)	21.7	<59.3**	—	—	7.2	<20.2*
無 責 任 な (-)		92.7	>55.0**	97.0	>83.9*	98.5	>72.4**
	(+)	1.4	<15.8**	—	—	—	—
あ き っ ぱ い (-)		53.6	>12.9**	85.5	>57.9**	82.6	>57.9**
	(+)	30.4	<57.9**	—	—	—	—
調 和 の と れ た (+)		56.4	> 8.5**	79.7	>36.1**	70.9	>33.2**
	(-)	11.6	<36.1**	—	—	—	—

註「ものを深く考える」は有意差なし

女子学生における自己と父母の認知について(5) (秋山)

表9 F4 明朗性を構成する項目についての2群間比較

(単位%)

項目	評定対象 群	自分自身	母 親	父 親
		大 小	大 小	大 小
明 る い (+)		91.3>65.2**	97.0>78.2**	82.5>34.7**
(-)		—	—	4.3<17.3**
ユーモアのある (+)		76.8>59.3*	78.2>44.8**	81.1>44.8**
(-)		—	5.8<18.8*	7.2<21.7*
友人の多い (+)		75.3>41.9**	81.1>52.0**	78.2>49.1**
(-)		5.8<24.5**	—	7.1<18.7*
さっぱりした (+)		62.3>36.2**	84.0>46.3**	70.9>34.7**
(-)		7.2<34.7**	2.9<20.2**	10.1<34.7**
冒険好きな (+)		60.8>43.5*	36.1>17.4*	—
(-)		—	33.2<52.1*	—
未来に大きな希望をもつ (+)		—	50.7>28.9**	59.4>34.7**
(-)		—	11.5<29.0*	—
孤独な (-)		60.7>26.0**	89.8>66.7**	79.6>46.3**
(+)		15.8<31.8*	—	—

は2群に差はなかった。父親では、几帳面でないとなげやりなところがあるで「小」>「大」になった以外は、ものを深く考えるを除いたすべての項目について、自分についての場合と同じ傾向をみせている。総じて、両親を誠実であると認知している学生は「大」群の方が多いといえよう。

明朗性を構成する項目について(表9)：明朗さにおいても、自分と両親について「大」群の学生の方が好ましい認知をより多くしているといえる。ここでもカラッとした「大」群の良さが浮き彫りになってくる。

その他の項目について(表10)：「しつと深い」と「不安定な」は、第1因子と第2因子に重複負荷した性格特性項目である。「小」群の学生達は、自分についてしつと深くて不安定、神経質と受け止めている者が多い。これに対し、「大」群の方は、不安定ではないと認知する者が半数はいたことを示している。その他の項目をみると、ニヒルでなく素直であるという認知者は4/5以上、疑い深くはなく、ヒステリックでないという受け止めをする者が半数以上で、「小」群の学生に比べて好意的な自己評価をする者が多いということはここでもいえる。両親に対して、しつと深い・不安定なと認知する者は2群とも多くはない。しかし、そうではないと言い切れる学生数はやはり「小」群の方が少ない。「神経質な」では、2群とも(+)(?)(-)の出現者が1/2ずつとなり差はなかった。他の9項目でも全体的に見通してみると、F1～F4を構成する項目群の場合と同じように、自分と両親を共に好ましく受け止めている学生は「大」群の方に多いといえる。

7 区分表示図でみた性格特性項目の出現分布

—— 2群の比較 ——

では、56の性格特性ないし行動特性項目は、7区分表示図を用いた場合どの区分で多くの出現をみせているのだろうか。今回は、20%以上の学生によって(+)か(-)の方向で選択された項目を取り上げた。図2をみると、似より「大」群では三者共通区分(③)へ項目が集中しており、

表10 その他の項目についての2群間比較

(単位%)

項目	評定対象 群	自分自身	母 親	父 親
		大 小	大 小	大 小
し っ と 深 い (+)	(+)	37.7<65.2**	—	4.3<15.9*
	(-)	33.3>14.5**	66.7>46.4*	75.4>46.4**
不 安 定 な (+)	(+)	24.6<60.9**	—	—
	(-)	50.7>8.7**	88.4>62.3**	94.2>55.1**
神 経 質 な (+)	(+)	49.3<71.0**	—	—
	(-)	34.8>17.4*	—	—
疑 い 深 い (+)	(+)	14.5<39.1**	5.8<26.1**	1.4<17.4**
	(-)	59.4>29.0**	79.7>46.4**	84.1>36.2**
ヒステリックな (+)	(+)	15.9<36.2**	—	8.7<26.1**
	(-)	55.1>31.9**	56.5>34.8*	85.5>56.5**
趣 味 の 広 い (+)	(+)	—	53.6>23.2**	56.5>34.8*
	(-)	—	24.6<49.3**	—
生き甲斐を感じる (+)	(+)	40.6>21.7*	55.1>34.8*	68.1>34.8**
	(-)	18.8<44.9**	4.3<18.8*	—
素 直 な (+)	(+)	76.8>40.6**	79.7>42.0**	65.2>18.8**
	(-)	4.3<29.0**	2.9<15.9*	13.0<30.4*
ニ ヒ ル な (-)	(-)	89.9>62.3**	87.0>62.3**	81.2>55.1**
体 の 強 い (+)	(+)	—	52.2>34.8*	78.3>56.5**
宗 教 的 な (-)	(-)	—	—	60.9>43.5*
古いものの考え方をする (-)	(-)	—	36.2>13.0**	—

註「理想主義的な」「独立心の強い」は有意差なし

ついで、父母共通区分(⑥)に多くの項目がみられた。「小」群の方は、当然ながら区分③への集中はみられず、表4の折にも指摘したように、区分①⑤⑦と区分⑥へ項目が分散している。自分のみの特徴・母親のみ・父親のみ・両親の特徴として項目を取り上げた者が多かったことを示しているといえよう。次に、個々の項目に目を向けてみると、自分のみ区分(①)の項目内容は区分⑤⑥⑦と対をなしていることがわかる。自分についてはマイナス的な受け止め方なのに対し、両親または片方の親についての認知はプラス的なのである。

7 区分表示法によって捉えられた2群の大きな差異は、自己についての認知の仕方の違いであるといえる。「大」群の学生達は、自分と両親との間に共通なプラスの受け止め方を多くしているために似よりを高めているのに対し、「小」群の者達は、両親と対峙した形で自己をマイナス的に捉えているので、三者の似よりが低くなるということがここでもよく分かる。

では、どちらの方の性格認知が、青年後期に入った学生達(1・2年生)にとって好ましいものなのだろうか。それは、当然「大」群の方としたいのだが、青年期の締め括りの時期で早々と、自分はすべてにおいてほぼOKと見なしている一群の方がより若者らしいといえるかと問われれば、あまりにまとまりすぎた自己認知像を持ってしまうとも言えなくもない。成人期への入口に近づいた学生時代を、もう一度両親との関係の中で、自己を否定的ではあってもじっくり見詰め直すことも大切なような気もする。これは、青年を傍からじっと見ているだけの、他者の一人よがりの主観の問題なのだろうか。

女子学生における自己と父母の認知について(5) (秋山)

似より「大」群

自分自身					
F1 しよげやすい オセンチな	ロマンチックな 他人を気にする	甘えた	F2 わがままな	F3 あきっぱい	その他 しっと深い 不安定な [9]
F3 献身的な [1]	F1 しよげない おく病ではない オセンチではない 意志は弱くない 甘えない 行動力のある 指導力のある スケールの大きな 内気ではない 服従的ではない F2 利己的ではない うぬはれは強くない わがままではない	○ひねくれているはない 頑固な ○粗暴ではない F3 ○礼儀正しい ○ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある ○正義感の強い F2 献身的な ○親切な ○やさしい なげやりではない	○無責任ではない あきっぱくはない 調和のとれた F4 ○明るい ○ユーモアのある ○友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ ○孤独ではない その他 しっと深くはない 不安定ではない 神経質ではない	○疑い深くはない ヒステリックではない 趣味の広い 生き甲斐を感じる ○素直な ○ニヒルではない 体の強い 宗教的でない 古いものの考え方をする	F2 強がり 頑固な [2]
	F1 しよげない おく病ではない 意志は弱くない 甘えない 行動力のある 他人を気にしない 指導力のある	スケールの大きな 内気ではない F2 うぬはれは強くない わがままではない 虚栄心は強くない F3 ねばり強い	包容力のある なげやりではない あきっぱくはない 調和のとれた F4 孤独ではない その他 しっと深くはない	不安定ではない 疑い深くはない ヒステリックではない [22]	F1 オセンチではない 他人を気にしない 指導力のある F2 頑固な その他 独立心の強い [5]
母親			父親		

似より「小」群

自分自身					
F1 しよげやすい おく病な オセンチな ○意志の弱い ○甘えた	他人を気にする 指導力がない スケールの小さい 内気な ロマンチックな	F2 利己的な うぬはれの強い わがままな ひねくれた	F3 ねばりがない ひたむきではない 包容力がない なげやりなところがある あきっぱい	調和がとれない F4 冒険好きな 未来に大きな希望 孤独な その他	しっと深い 不安定な 神経質な 疑い深い 生き甲斐を感じない 宗教的でない [29]
F1 ロマンチックな 他人を気にする F3 献身的な F4 明るい [5]	その他 理想主義的な	F2 強がり 頑固な 粗暴ではない F3 親切な やさしい [9]	無責任ではない F4 明るい その他 ニヒルではない 宗教的でない	F2 強がり 頑固な F3 ものを深く考える 正義感の強い [4]	
F1 しよげない 意志は弱くない 内気ではない 利己的ではない F2 うぬはれない わがままではない ひねくれているはない 頑固ではない 粗暴ではない F3 ねばり強い [20]	几帳面な ひたむきな 献身的な なげやりではない あきっぱくはない F4 さっぱりした 冒険好きではない 孤独ではない その他 不安定ではない 体は強くない	F1 おく病ではない オセンチではない 意志は弱くない 甘えない 行動力のある 内気ではない F2 わがままではない ひねくれているはない F3 礼儀正しい ねばり強い 包容力のある [19]	親切な やさしい なげやりではない 無責任ではない あきっぱくはない F4 孤独ではない その他 しっと深くはない 不安定ではない	F1 しよげない おく病ではない オセンチではない 意志は弱くない ロマンチックではない 行動力のある 他人を気にしない 指導力のある スケールの大きな 服従的ではない F2 支配欲の強い 虚栄心は強くない F3 献身的ではない あきっぱくはない F4 冒険好きな その他 ヒステリックではない 趣味の広い 体の強い [18]	
母親			父親		

図2 7区分表示図でみた性格特性項目の出現分布

(註) ○: 50%以上の出現をみせた項目

鯨岡のいう「間主観性 intersubjectivity」の概念<sup>11)</sup>をここに投入したならば、出会いという次元から2群の学生をみる場合、「われとなんじ」の関係に入る可能性が高いのは、むしろ対峙的关系を他者との間にみせる似より「小」群の学生達の方ではないかという気がしたりもする。Erikson, E. H. の自我同一性の立場からみた場合<sup>15)</sup>、似より「大」群の学生は全員がほぼ

自我同一性の拡散を乗り越えて、自己確立を成し得た者と見なしてもよいのであろうか。それとも、ずっと子どもの時期から、このように三者の間に高い性格認知の一致をみせながら成長してきているのだろうか。Marcia, J.E. の研究で言えば<sup>15)</sup>、同一性達成地位にあるものと権威受容地位にある者の違いということになろうか。これに対し、「小」群の者達は、まったく自我同一性の拡散の中に浸っているのだろうか。それとも、この対峙の形のままで自我同一性の確立を押し進めていくのであろうか。興味のあるところではある。

ここで、どうしても触れておかねばならない方法論上の大切な問題がある。それは、なぜ1980年から1984年まで続けてきた認知タイプによる研究を中断してまで、1985年より似よりによる分析に入ったのかということである。この事情を説明するために「似より」と認知タイプとの関係について少し述べておこう。

#### 「似より」と認知タイプとの関係について

三者共通(C)型、母子接近(M)型、父子接近(F)型、父母接近(P)型、個性(I)型と名付けられた5つの純型と、それらの組み合わせた複合型があることを1980年・1981年の論文で紹介し<sup>2)3)</sup>、このタイプをもとにして1981年から1984年にかけて一連の学会発表がなされた<sup>5)6)7)8)</sup>。しかし、5つの純型のうち高い出現率でコンスタントに取り出せるのは、C型とP型が中心であった。M型やF型は、上位1/4以内(Q<sub>3</sub>)の者を基準にしてピックアップをする場合、前者が25～26%以上、後者が20%強の出現率ということがしばしばであった。30%以上の出現率を2部分(M型では区分②の「自分自身」と「母親」、F型では区分④の「自分自身」と「父親」)でみせる者は、C型とP型に比べるとぐんと少なくなるという欠点をもっている。20%の出現率といえ、56項目すべてに「はい」か「いいえ」で答えた場合でも11～12項目であり、まして、三つの評定対象についての「はい」・「いいえ」の選択項目数が少なくなる場合には、その区分(M型は区分②、F型は区分④)に入る項目数はもっと減ってしまう。そういう学生をも含めてM型、F型と呼ぶのにはかなり気分的な抵抗があったことは否めない。残りのI型については、該当する学生の数が極端に少ないという問題がある。

もう一つの問題は、純型の5タイプを合わせても大体いつも半数位のデータしか研究のために使用できないということである。そんな折に秋山・有馬(1985)の研究<sup>4)</sup>が実施されたのである。因子分析の結果4因子を析出し、この4因子の平均得点を用いてクラスター分析を試みたのはすでに述べたことである。このクラスター分析とは、全対象を少数個のクラスターに分割するということであり、「似ているもの」を集めるという手法である。この時に「似より」という概念が浮上してきた。7区分表示法を使用する場合にもこの似よりに基づく群分けは有効であるはずである。この発想が、認知タイプ抽出のもつこれらの課題を一時棚上げにしておいてでも、似よりによるデータの仕分けに挑戦してみようと考えさせたのである。では一体何を基準にして似よりを捉えていくのか、という点で少々試行錯誤を続けたが、三者共通区分(③)の部分[自分]に焦点を当ててみることで解決をみた。そこでまずは、1982年12月に実施したデータを再整理して、似よりにもとづく4群の特徴を検討してみたのが本研究につながった。

では、これまで取り上げてきた認知タイプは、似よりによる4群とどのように対応しているのだろうか。この関係をみたのが表11である。各区分で上位1/4以内の出現率をみせることを基準としてタイプ分けの作業はなされている。C型では、区分③の3部分[「自分自身」「母親」「父親」]が共に上位1/4の中に入っていることが条件。M型、F型、とP型では、それぞれ区分

女子学生における自己と父母の認知について(5) (秋山)

表11 似よりによる4群と認知タイプとの関係

(単位 人数の%)—各群 n=69, 全体 N=276—

認知タイプ		大	中上	中下	小	全体
純 型	三者共通 (C) 型	63.8				15.9
	母子接近 (M) 型		14.5	24.6	10.1	12.3
	父子接近 (F) 型	1.4	15.9	8.7	7.2	8.3
	父母接近 (P) 型	11.6	18.8	17.4	10.1	14.5
	個性 (I) 型				8.7	2.2
						—小計53.2
複 合 型	③+④, ③+⑤, ③+⑥	11.6				
	④+⑤, ④+⑥, ⑤+⑥			2.9	7.2	
	①+④, ①+⑤, ①+⑥				11.6	
						—小計 8.3
中 性	③+母のみ	1.4				
	④+母のみ, ④+自分のみ					
	⑤+母のみ+自分のみ			2.9	14.5	
	⑥+父のみ, ⑥+自分のみ			2.9	8.7	
	⑥+母のみ, ⑥+父のみ			1.4	5.8	
						—小計 9.4
計		91.2	70.9	69.5	85.3	79.2

②, ④, ⑥の中の2部分が共に条件をみたしていること。さらにこの3タイプでは, 区分⑦ (M型), 区分⑤ (F型), 区分① (P型) も上位¼以内の条件を満たしている場合は典型的なタイプとみなした。それゆえ, 「F型+父のみ」のように, 区分④と区分⑦が上位¼に入るような出方をするものは, 複合型の中に位置づけられた。I型は, 区分①⑤⑦の出現率のみが上位¼以内になった者とした。このタイプは, 自分と母親と父親を別々の独自な存在として認知していることを示しているが, 時々3つの評定対象について「はい」と「いいえ」で評定された選択項目数がありにも少ないためにこのタイプになることもある。「中性」というのは, いずれの区分においても上位¼以内の値 (出現率) を示さなかった者のみを取り上げている。タイプ抽出作業では, 下位¼以内に入る出現率というものをあまり重視しない弱点があるので, 中性の者がすべて7区分に同数位の項目を入れていたという見方はとれない。どこかの区分が下位¼以内の出現率という場合でもこの中性の中に入れている。

似よりからみた4群と比較してみると, C型は「大」群のみであるが, M型・F型・P型の3タイプは3群ないし4群にわたって出現している。三者の似よりがかなり高い者 (「中上」群) から非常に少ない者 (「小」群) まで分布するということは, 同じ認知タイプとしてまとめられてはいても, 質的な面で差異が生じるという可能性も大であるといえよう。P型で似より「大」群に入る者が11.6%もいるが, これは, 評定対象「自分自身」について「はい」か「いいえ」の判断が両親に比べて少なかったことによる。その結果, 相対的に区分③の部分 [自分] の出現率のみが高くなることになり, そのために両親の間で一致する項目が増える可能性がアップするわけで, その分だけ区分⑥の値は大きくなるということである。P型にはこのような場合も含まれているのである。

では, 似よりによる群分けの方がすべての面でよいといえるのであろうか。似より「大」群は, C群が中心であり, ほぼ同質なメンバーが中心となって構成されているのに対し, 似より「小」群では, いろいろなタイプの者が包含されており, 異質なものをかき集めた集団という

印象が残る。しかし、ここ暫くの間は、この似よりを基にした群分けでの比較検討を続けていくことにしたい。3つの評定対象に対して「はい」か「いいえ」で回答した項目数に極端なアンバランスがない場合には、すべてのデータを生かし切ることができるこのメリットを大切に、データの諸分析を試み、その後認知タイプの検討へと研究を押し進めればよいであろう。

### クラスター分析から思いついた手計算的アプローチの試み

#### その1. H得点者とL得点者のパターン分析で三者間認知はどこまで迫れるか

前報<sup>4)</sup>では、コンピューターを用いて、3評定対象×4因子の計12の因子得点を基にした評定者(279)×評定者(279)の相関行列(類似性行列)を求め、ついでこれを入力データとして平均距離法による階層クラスター分析を実施した。今回は、クラスター分析によって得られたデータと、似よりもとづく4群との関係をみていくうちに、思いついたアプローチを取り上げてみることにした。コンピューターと正面から勝負をしようという気などまったくないが、もっと身近なやり方でその解析のメカニズムの一端を覗いてみたいと考えたのである。ここでは5段階評定で得られた各因子の平均得点をもとに分析を試みている。

まず、276人を平均得点以上の点を出した者(H)とそれ未満の得点を示した者(L)に分ける作業が行われた。これを3評定対象×4因子×2群(「大」群と「小」群)で表したのが表12である。2群の間にはすべての関係において有意な差がみられた( $\chi^2$ 検定,  $P<.01$ )。これまでみてきたことの繰り返しではあるが、「大」群と「小」群におけるH得点者とL得点者の出現率の出方は、まったく逆の関係になっている。F1とF2でのH得点者とL得点者(以下HとL)の出現率をみると、自分と両親の三者共に「大」群の方が得点の低い者が多く、「小」

表12 3評定対象×4因子でみた2群のH者とL者の出現率  
(単位%)

評定対象	群	因子	F1	F2	F3	F4
自分 自身	大	H	37.7	34.8	79.7	72.5
		L	62.3	65.2	20.3	27.5
	小	H	65.2**	65.2**	21.7**	30.4**
		L	34.8	34.8	78.3	69.6
母 親	大	H	34.8	27.5	69.6	71.0
		L	65.2	72.5	30.4	29.0
	小	H	63.8**	63.8**	36.2**	33.3**
		L	36.2	36.2	63.8	66.7
父 親	大	H	37.7	36.2	73.9	79.7
		L	62.3	63.8	26.1	20.3
	小	H	63.8**	60.9**	24.6**	40.6**
		L	36.2	39.1	75.4	59.4

註 H: 平均得点以上の得点を示した者

L: 平均得点未満の得点を示した者

$\chi^2$ 検定 (\*\*  $p<.01$ )

女子学生における自己と父母の認知について(5) (秋山)

群の方は逆に得点の高い者が多かった。F3とF4では2群の出方は反対になっている。この表12は、因子別平均得点を基にしてまとめられた表5の結果を、HとLの出現率に置き換え直してみたものといえる。しかし、平均得点を用いるにせよ、H・Lを用いるにせよ、このようなまとめ方をいくら積み重ねても、因子間相互の結びつき(関係)がどのようになっているのかを知るための資料としては不十分である。

ここに到って気付いた事は、HとLの組み合わせパターンを生かしてみることである。4つの因子の間でHとLの組み合わせをみると、そのパターン数は16となる。この16パターンの出現率

表13 4因子のHとLの組み合わせ16パターンの3評定対象×4群の出現率

(単位%)

F1	F2	F3	F4	自分自身				母 親				父 親			
				大	中上	中下	小	大	中上	中下	小	大	中上	中下	小
H	H	H	H	8.7	11.6	7.2	0.0	2.9	4.3	5.8	1.4	4.3	5.8	5.8	1.4
H	H	H	L	5.8	2.9	5.8	2.9	2.9	7.2	8.7	5.8	2.9	4.3	4.3	2.9
H	H	L	H	1.4	0.0	7.2	11.6	2.9	1.4	5.8	5.8	2.9	1.4	4.3	11.6
H	H	L	L	0.0	1.4	14.5	31.9	0.0	8.7	10.1	26.1	2.9	5.8	21.7	21.7
H	L	H	H	10.1	4.3	2.9	1.4	8.7	4.3	1.4	4.3	15.9	4.3	1.4	1.4
H	L	H	L	8.7	13.0	5.8	0.0	10.1	13.0	10.1	7.2	4.3	7.2	5.8	7.2
H	L	L	H	2.9	4.3	1.4	5.8	2.9	4.3	4.3	2.9	2.9	5.8	2.9	4.3
H	L	L	L	0.0	2.9	8.7	11.6	4.3	7.2	8.7	10.1	1.4	11.6	13.0	13.0
L	H	H	H	11.6	11.6	7.2	4.3	8.7	14.5	10.1	5.8	13.0	14.5	4.3	5.8
L	H	H	L	2.9	2.9	7.2	5.8	2.9	1.4	2.9	4.3	0.0	1.4	4.3	0.0
L	H	L	H	4.3	8.7	7.2	1.4	7.2	5.8	7.2	8.7	10.1	4.3	4.3	8.7
L	H	L	L	0.0	7.2	4.3	7.2	0.0	1.4	5.8	5.8	0.0	5.8	7.2	8.7
L	L	H	H	26.1	11.6	2.9	1.4	29.0	10.1	5.8	4.3	27.5	14.5	13.0	5.8
L	L	H	L	5.8	7.2	2.9	5.8	4.3	2.9	4.3	2.9	5.8	4.3	2.9	0.0
L	L	L	H	7.2	7.2	8.7	4.3	8.7	7.2	5.8	0.0	2.9	8.7	2.9	1.4
L	L	L	L	4.3	2.9	5.8	4.3	4.3	5.8	2.9	4.3	2.9	0.0	1.4	5.8

表14 似より「大」群と「小」群の特徴を示す4因子のH・Lパターン

(単位%)

F1	F2	F3	F4	自分自身		母 親		父 親	
				大	小	大	小	大	小
L	L	H	H	26.1	1.4	29.0	4.3	27.5	5.8
L	H	H	H	11.6	4.3	8.7	5.8	13.0	5.8
H	L	H	H	10.1	1.4	8.7	4.3	15.9	1.4
H	H	H	H	8.7	0.0	2.9	1.4	4.3	1.4
H	L	H	L	8.7	0.0	10.1	7.2	4.3	7.2
L	L	L	H	7.2	4.3	8.7	0.0	2.9	1.4
H	H	L	L	0.0	31.9	0.0	26.1	2.9	21.7
H	L	L	L	0.0	11.6	4.3	10.1	1.4	13.0
H	H	L	H	1.4	11.6	2.9	5.8	2.9	11.6
L	H	L	L	0.0	7.2	0.0	5.8	0.0	8.7

を3つの評定対象ごとに4群の間でまとめたものが表13である。この16のパターンは同じように出現しているのではなく、かなりの違いをみせて出現していることが分かる。「大」群と「小」群にのみ注目してこの表を見てみると、多くの出現をしているパターンは限られており、しかも2群の出方には質的な相違がみられることも読みとれる。そこで、この2群の間の特徴をよく示すHとLの組み合わせパターンだけを抽出してみたのが表14である。ここでは、表12で推測されたLLHHの形が「大」群の特徴として、HHLLの形で捉えられるものが「小」群の特徴として、3つの評定対象とも第1位を占めている。

ここまで追い詰めてくると、次に問題となるのは、3つの評定対象間の関係（つながり）をどう捉えていくかということである。つまり、自分自身についてLLHHパターンをみせた学生は、母親と父親についても同じパターンを示すのかどうかということである。この問いに対しては、この表14は何も答えてくれない。そこで、2群の各69名の三者のH・Lパターンを一人ずつ併記させつつ、三者間相互のパターンの出方を比べてみることにした。表15は、三者間あるいは二者間で共通なH・Lの出現パターンをみせた者と、三者とも別々の出現パターンをみせた者を2群についてまとめたものである。この表には、さらに「大」群ではLLHHパターンの出現を「小」群ではHHLLパターンの出現をみせた者の人数が付け加えられている。付記した数値の見方を少し説明しておこう。二者間に共通な出現パターンをみせた者の中で、似より「大」群の自分と母親を例に上げてみると、LLHHの者の欄に6+（父のみ3）とあるが、これは自分と母親とはLLHHパターンになるが、父親の方は違うという学生が6名おり、自分と母親はLLHH以外の共通なパターンをみせたのに対し、父親のみがこのLLHHパターンであった者が3人いた、ということを示している。

表15 4因子のH・Lの出現パターンを用いた3つの評定対象間のつながり

	似より「大」群			似より「小」群		
	n	%	内 $\overline{L-L-H-H}$ の者	n	%	内 $\overline{H-H-L-L}$ の者
三者に共通な出現パターンをみせた者	4	5.8	2	1	1.4	1
二者に共通な出現パターンをみせた者						
自分と母親	16	23.2	6+（父のみ3）	12	17.4	5+（父のみ3）
自分と父親	10	14.5	4	5	7.2	1+（母のみ4）
母親と父親	21	30.4	10+（自のみ3）	6	8.7	3+（自のみ2）
三者とも別々の出現パターンをみせた者	18	26.1	（自のみ3, 母のみ2）	45	65.2	（自のみ13, 母のみ5） 父のみ6

三者共に同じパターンをみせるような認知をした学生は、ほとんどいないということがわかる。「大」群では、三者あるいは二者に共通なパターンをみせるものが51名（73.9%）、そのうちLLHHパターンが22人（32%）もいる。これに対し、「小」群では24名（34.7%）で、そのうちHHLLパターンの者は10人（14.5%）であった。「小」群は、三者が別々のパターンをみせる者が多い（65.2%）。HとLという二分法を用いた比較的簡単なパターン分析でも、三者の関係を同時に検討することの難しさがよくわかった。H・Lパターン分析による追究はここまでに留めることとし、次に、コンピューターによるクラスター分析の結果と、今回の似より4群との関係をみてみたい。

その2. 7区分表示法によって得られた似よりによる群とクラスター分析で抽出されたクラスターとの関係を見る

秋山・有馬 (1985)<sup>4)</sup>では、平均距離法による階層クラスター分析を実施し、18のクラスターに分けるよう指示を与えた結果、8つのクラスターで全評定者の95.3%を包括した。しかし、第Iクラスター(CI)に属するものが全体の70.3%を占め、“似ている”という判断処理がなされていた。CIとCIIの間で構成人数に大きな相違が出たため、CIに注目し、等質な集団として一度は群化されてはいるが、掘り下げてみればそれなりの差異はみられるはず、ということで再度クラスター分析を試み、35コのクラスターを抽出するように命令してみた。ここでは、C1からC8までの8つのクラスターの中に72.4%が包括されていた。この前回に報告したデータに、今回の似よりにもとづく4群の出現人数を付け加えてみたものが表16である。

初回のクラスター分析におけるCIは、4群共に多くの人数をかかえている(似より「大」群58.0%、「中」群71.0%、「小」群79.7%)。CIIの構成は、「大」群と「中上」群で全体の93.8%を占めていた。「大」群は69名のうちCIとCIIで88.4%が包括されるのに対し、「小」群の方はCIのみで約8割となっている。CIの再クラスター分析の結果では、C1, 3, 6が「大」・「中上」群中心、C2, 4, 7, 8が「小」・「中下」群主体の構成になっていた。

コンピューターが処理したやり方をそのまま体験することはできないけれど、今回のH・L

表16 クラスター分析で抽出されたクラスターと似よりによる4群の人数比較

調査全体(N=279)のクラスター分析で抽出されたクラスターと似より群との関係

クラスター	I	II	III	IV	V~×VIII
n	196	32	8	7	36
出現率 (%)	70.3	11.5	2.9	2.5	12.9
似より「大」群	40	21	0	4	4
「中上」群	49	9	1	1	9
「中下」群	49	2	6	2	10
「小」群	55	0	1	0	13
その他	3				

↓

クラスター I (n=196) の再クラスター分析で抽出されたクラスターと似より群との関係

クラスター	1	2	3	4	5	6	7	8	9~35
n	49	33	9	10	4	12	16	9	54
出現率 (%)	25.0	16.8	4.6	5.1	2.0	6.1	8.2	4.6	27.6
似より「大」群	22	4	4	0	2	4	0	0	4
「中上」群	18	6	3	1	1	6	3	0	11
「中下」群	8	11	1	3	0	0	4	2	21
「小」群	1	11	1	6	1	2	8	7	18
その他		1					1		1

表17 H・L パターン分析からみた初回クラスター分析のCIとCII

(単位 H と L : 人数)

(準位 II と L: 人数)

評定対象 因子	自 分 自 身				母 親				父 親					
	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4		
N=279の平均得点	3.26	3.09	3.40	3.61	2.57	2.52	3.77	3.65	2.25	2.82	3.74	3.55		
C I (n=196)	H	91	96	86	95	106	96	92	94	112	100	85	93	
	L	105	100	110	101	90	100	104	102	84	96	111	103	
内「大」群 (n=40)	H	12	13	28	27	16	13	23	26	17	16	30	30	
	L	28 <sub>*</sub>	27 <sub>*</sub>	12 <sub>*</sub>	13 <sub>*</sub>	24	27 <sub>*</sub>	17	14	23	24	10 <sub>*</sub>	10 <sub>*</sub>	χ <sup>2</sup> 検定
内「小」群 (n=55)	H	37	34	9	15	37	34	18	15	36	31	15	23	
	L	18 <sub>*</sub>	21	46 <sub>*</sub>	40 <sub>*</sub>	18 <sub>*</sub>	21	37 <sub>*</sub>	40 <sub>*</sub>	19 <sub>*</sub>	24	40 <sub>*</sub>	32	χ <sup>2</sup> 検定
C II (n=32)	H	17	16	29	29	6	9	28	26	7	10	24	30	
	L	15	16	3 <sub>*</sub>	3 <sub>*</sub>	26 <sub>*</sub>	23 <sub>*</sub>	4 <sub>*</sub>	6 <sub>*</sub>	25 <sub>*</sub>	22	8 <sub>*</sub>	2 <sub>*</sub>	χ <sup>2</sup> 検定
内「大」群 (n=21)	H	11	9	20	20	4	6	20	19	5	7	17	21	
	L	10	12	1 <sub>*</sub>	1 <sub>*</sub>	17 <sub>*</sub>	15	1 <sub>*</sub>	2 <sub>*</sub>	16 <sub>*</sub>	14	4 <sub>*</sub>	0 <sub>*</sub>	2項検定

註 \* p&lt;.05

パターン分析をここに持ち出してみよう。まずは初回のクラスター分析で得られたCIとCIIに焦点を絞ってみた(表17)。ここでは、279人の平均得点を基にしてHとLを抽出したので、出現人数には多少の違いが出ているかもしれない。CIは何らかの似よりによって等質であると群化されたものではあるが、「大」群と「小」群に分けてHとLの人数を出し、その出現差を比較してみた( $\chi^2$ 検定)。結果は、かなりの相違をみせているのである。「大」群の方は、自分をF1(低)、F2(低)、F3(高)、F4(高)とみる者が多いのに対し、「小」群の者は、F1(高)、F3(低)、F4(低)とするものの方が多く、2群の捉え方はこれまで見てきたと同じように逆になっている。さらに、両親の受け止め方にも差がみられる。H・Lパターンで捉える表面的な把握とコンピューターが処理したものとの差は一体何なのだろうか。CIIでは、「小」群は0人のため「大」群のみをみたが、自分についてはF1とF2ではHとLに出現差はみられず、F3とF4で(高)、母親は、F1とF2が(低)、F3とF4が(高)、父親については、F1(低)、F3とF4(高)という出現差をみせた(2項検定)。「大」群同士の比較からみれば、CIとCIIに仕分けしたコンピューターの処理の違いは、ある程度理解できそうである。しかし、ここに「小」群の約8割をも包括してしまうCIの似よりとは何かと問われれば、やはり説明をすることができない。

同様に、CI(n=196)の再クラスター分析により群化されたC1~C8にH・Lパターン分析で詳細に迫ってみたけれど、あまりにも細部にこだわったような仕分けを要求されるので、今回はここまでの対比較に留めるべきだと思う。大まかにまとめれば、C1, 3, 6の出方は「大」群のようなH・Lパターンの様であるが、有意な差をみせる因子の箇所が違ふということであり、C2, 4, 7, 8の場合は、「小」群のような出方をし、細かい部分において有意差の出る箇所が異なるということである。3評定対象×4因子の計12コの平均得点を同時展開させながら、その特徴をH・Lパターンで見ようとする方法でも、C1~C8の三者間認知の特徴をある程度裏付けることは可能である。しかし、コンピューターもそんな細部にかかわって群化の作業を

したのかと聞かれると、やはり分からない。同じ土俵の上で、自分と両親のデータを並べて把握していこうというやり方は、読み取り（意味するものの汲み取り）にかなりの無理が生じてしまう。前回の論文の見通しでも触れたように<sup>4)</sup>、女子学生達の自己把握と両親のそれとは、一先ず切り離して検討する方がやはり無難な事なのであろうか。

今回の分析研究で分かった大切な事は、パーフェクトを狙うことはできないということであった。コンピューターでさえ、曖昧性を取り込んで処理をしているのではないかという気付きである。何もかも含み込んで理想的に抽出できる方法など今のところ無いのではないか。12のデータを同時展開させようとする、どこかで“似ている”という拾い方をして、群化作業を進めるという妥協をしているのではないか。もし、コンピューターの処理でもそうであるとするならばなおのこと、人間は“あいまいさ”が許されるからこそ、人間たりうるのではないかということ、目が醒めた。

もう一つの気付きは、狙っているものにだけ捕われるのではなく、その背景にあるもう一回り大きな領域にも目を向けることによって、何かが見えてくるということである。換言すれば、図が図たりうるのは、地（背景）があってこそということなのである。「自分自身」あるいは自己というものを研究の対象としていくとき、似よりによって分けた4群で差異がみられたとしても、その違いは、もっと大きい両親についての認知という枠の中に入れてみていくと、あまり固執しない方がよいのではないかということである。例えば、H・Lパターンで述べてみると、HLHH（学生A）とLLHH（学生B）の2人は、F1（内向性）でHとLに関して差をみせた者として異質な存在とみなされる。しかし、ここに両親との関係を付与させて捉えてみよう。学生Aは（自分：HLHH、母親：LLHH、父親：LLHH）で、学生Bが（自分：LLHH、母親：LLHH、父親：LLHH）とするならば、両親の認知では共通となり、自分についてのF1だけで若干の差をみせるとしても、AとBは案外近い関係にあると言えるかもしれないのである。ひょっとしたらコンピューターによるクラスター分析でも、このような処理をしているのではなかろうか。

ここまで考え方を押し進めてくると、鯨岡の発達—現象学的アプローチ<sup>10)</sup>が身近になってくる。「発達するということは、一. 個体機能的次元、二. 子ども—大人の関係論的次元、三. 社会文化状況論的次元が相互に他を規定しあい、貫入しあいながら展開をみる過程だということである。(p. 228)」これをひとりの子どもに定位してみれば、「三つの複合的次元とはすなわち子どもの生活世界であり、従って発達するということは子どもの生活世界がその子の持つ力、その子の周りの諸物や人々との関係、その子の生きる文化との関連で再編、再体制化されていくことに他ならない。(p. 229)」“ある行動変化をそのような背景の上の「図」として読解せねばならぬ”という彼の主張の意味が少しばかりみえてくる。

横山（1987）は、「十牛図の世界」に自分の生き方を重ね合せながら、騎牛帰家の章で次のように記している<sup>16)</sup>。「『自分は自己の内にある自分ではない。他者のなかにある自分であり、他者は他者の内の他者ではない。自分のなかにある他者である』と自覚するならば、これまでとはちがった他人観と自己観とが、そして新しい世界観と人生観とが開けてきます。自分とは、自分だけの自分ではない。他者の内にある自分でもあるから、自分を厳しく律せねばならない。また他者は自己の外のみにある冷たい他人ではない。自己の内の他者であるから、他者を暖かく迎え入れなければならない、とこのように気付くからです。(p. 251)」この考え方は、単に東洋においてだけ通用する思想ではない。西洋人であるブーバーも「われとなんじ」の関係を

説いているのではない<sup>12)</sup>。

他人と自己とは別々の存在ではない。自分の心の中に映し出された他者があってこそ、本当の自己に出会えるのである。また、そういう他者を受け入れようとする気持ができあがってこそ、自己が他者がイキイキと知覚され、一体化への関係へと結びついていくのであろう。「自己を知る」ということは、自己の中に他者を見い出すことである。自分を今日たらしめているのは、両親をはじめ、いろいろな人々との出会いのお陰であるということに気付き、出会いなくして今の自己はありえない、という感謝の気持が素直に出てくることにあるのであろう。この新鮮な考えの下で、女子学生における自己と父母の認知についての研究が一步でも二歩でも前に進むことを期待したい。

われわれは、謙虚だが、自己を卑下することもなく、この世に生を受けたたった一人の尊い生命であることを忘れず、日々の生活を精一杯生きていく同伴者でありたい。

## 文 献

- 1) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 VIII 23-38 1974
- 2) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(2)——4年間の縦断的研究—— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74 1980
- 3) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(3)——タイプ分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 16 61-72 1981
- 4) 秋山幹男・有馬道久 女子学生における自己と父母の認知について(4)——因子別得点をもちいたクラスター分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 20 57-68 1985
- 5) 秋山幹男 「父—母—娘」三者間の認知について(1)——学生(娘)からみた2種の認知タイプの比較と自己把握度—— 日本心理学会第45回大会論文集 500 1981
- 6) 秋山幹男 「父—母—娘」三者間の認知について(2)——娘(学生)における2種の認知タイプと両親の結果—— 日本心理学会第46回大会予稿集 284 1982
- 7) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(4)——認知タイプ別にみたY-G性格検査の分析—— 日本心理学会第47回大会論文集 505 1983
- 8) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(5)——認知タイプ別にみた青年らしさと自分自身の性格クラスター分析—— 日本心理学会第48回大会論文集 564 1984
- 9) 秋山幹男 女子学生とその両親がみた性格の相互認知について——娘による三者の似よりをもとにした分析—— 中国四国心理学会第43回大会論文集 第20巻 54 1987
- 10) 鯨岡 峻 心理の現象学 第4章<発達する>ということ 177-255 世界書院 1986
- 11) 鯨岡 峻 母子関係と間主観性 心理学評論 29 506-529 1986
- 12) マルティン・ブーバー 植田重雄訳 人間の復興 河出書房 1964
- 13) 西平直喜 新しい存在と価値の発見 津留宏編 青年心理学 133-180 有斐閣 1970
- 14) 西平直喜 青年心理学方法論 有斐閣 1983
- 15) 鐘幹八郎・山本 力・宮下一博 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版 1984
- 16) 横山紘一 十牛図の世界 講談社 1987

(初等教育学科 教授)

—昭和63年9月30日 受理—